

臨床心理士・公認心理師試験対策授業研修会

日本語別科長 准教授
教育学修士 八木裕子

この授業は受講者 11 名、90 分 2 コマ続きで実施された。初めに教師の心得について 15 分ほど中島総長からお話があり、次に過去問とその解説の音読・暗記を交互に繰り返して進められた。2 コマ目始めの 10 分間で 1 コマ目の復習と再度の暗記。2 コマ目に本日の学習範囲が終了すると、20 分間ですべての復習と再々度の暗記をし、その後に確認テストを実施した。

授業開始時に、次のような中島総長のお話があった。「授業の目的に合わせて、教え方を変えることが必要である。試験対策授業では受講者全員が合格するように教える。生徒の頭がいいとか悪いとかは関係ない。かつて専門学校時代に佛教大の大学卒業資格試験の授業があった。1 年目は大学の先生を 3 名雇用して担当してもらったが、受講者のうち 1 名も合格できなかった。中島総長が教え方を（厳しく）先生方に教えたところ、1 週間で全員辞表を出した。その後は修士取得者を雇用し、中島総長の指導後にその先生方が学生を教えたところ、100%合格するようになった。今日学習する問題はパターンが決まっている。5 年分ぐらいの過去問をしっかりとやって全部暗記してしまうのが有効な方法である。先生方の学問的な知識を様々述べる必要はない。余計なことを述べるとかえって学生たちは理解できなくなり効果が上がらない。目的は何かと言えば、学生を（資格試験に）うからせることである。（このような授業では）学問を教えようと思わなくてよい。学生は試験にうかってから後にゆっくり勉強すればよい。（この授業では）教科書の問題を解いて全部暗記させていく。」「試験対策授業」の考え方として、筆者はこれに全面的に同意する。筆者が他の教員や学生によく話すのは「合格するためには試験に出る問題を勉強すればよい。余分な勉強にエネルギーを使うな」ということだ。受験はあくまでも受験でしかない。合格しなければ意味がない。まじめな学生ほど、ともすれば「あれもこれもやらなくちゃ。あー、どうしよう、間に合わない！」という状況に陥りがちだ。中島総長の言われるように「他のものにいろいろ手を出さず、先生を信じてこれだけしっかりやりなさい。」と的を絞って、勉強すべきことを提示すれば、勉強が苦手な学生でも「これぐらいならなんとかがんばれる」と思える。その上で教師が絶え間なく励まし鼓舞することにより、学習を持続することができる。

「努力することを教えるのが教師の務め」「学生が学ぶことを手伝うのが仕事」という言葉も全く同感である。試験対策に限らず、授業時間中はできるだけ学生に作業・活動をさせることを念頭に、教師は後ろに下がりむしろ存在を消しているぐらいがよいと考えている。

本日の授業内容はやろうと思えば学生が一人でできることではあるが、それがなかなかできないのが人間というものである。教師の指示に従ってクラスメイトと共に進むとで、全員の集中度が上がっていくのを見てとれた。確認テストという、直後の目標設定のおかげでその前の暗記にも集中していた。確認テストの結果は全員満点で学生たちは学習の手ごたえを感じたことと思う。